

## 若い教師が育つ学校

明けましておめでとうございます  
2024年（令和6年）の始まりです 本年もよろしくお願いいたします

コロナ禍の規制が緩和され、学校に活気が戻った昨年、私が特に感じたのは、子どものこと、授業のことに生き生きと取り組む若い人が目立つようになったということである。子どもたちが未来の社会を担うのと同じように、これからの学校を担うのは若い人たちである。その若い人が意欲的になっている、それはとつてもよいことである。

「若い教師が育つ学校は、基本的によい学校である」、そう言われる。当然のことだが、若い人の経験は少ない。しかし、逆に考えれば、それは、これまでの教育の方法にとらわれない新しい実践が生まれる可能性があるということである。若い人が生き生きすれば、そういう傾向が強くなる。

しかし、どんな学校でもそうなるわけではない。そこには一つの条件があるように思う。それは、中堅、ベテランの教師が、時代が求める教育への認識を抱いていることである。先輩教師が旧態依然とした認識のままで、そういう認識ののつとつたやり方を強いる日々が続くと、若い人の実践もその範疇のものとなってしまう。その逆で、先輩教師が若い教師を温かく見守り、若い人とともにこれからの時代につながる教育のあり方を目指し実践する学校であれば、間違いなく若い教師はのびのびと取り組める。つまり、若い教師が育つ学校は、中堅、ベテラン教師が意欲的になっている、だからよい学校になるのである。

### 1 子どもが夢中になった初任者の授業

I 小学校は本年度から訪問するようになった学校である。ということは、先生方の「学び合う学び」は本年度になって本格化したということである。

たった8か月で、子どもたちの学ぶ姿は大きく変化した。いくつもの学級で、どう考えてよいか分からないままになっている子どもが散見されていたのが、今、どの教室に行っても、子どもと子どもがつながり合って学んでいる。

H先生は、その学校に初任者として着任した。そして、学校全体の「学び合う学び」への取り組みの渦に自然な成り行きで加わった。その結果、教師として大切にしなければいけないことはこういうことで、そのためにこういう方法をとるのだということを疑うことなく学んでいったのだと思う。その吸収力はこれまでの経験がない分早かったのではないだろうか。

12月のある日、私が訪問して校内授業研究会が開かれた。彼女の授業は、全学級を私が参観する午前中の授業ではなく、すべての教師が参観して検討する午後の研究授業として行われた。そこで、

居並ぶ先輩教師を感心させる授業をしたのである。

### ① 学習課題の確かさ

教科は算数科、単元は「分数」である。3年生の子どもたちにとって分数の学習は、2年生において学んだ、 $1/2$ 、 $1/3$  程度の簡単な知識をもとに、分数の用い方、表し方を確かなものにし、足し算・引き算ができるようにしていくことになるのだが、さらに、整数・小数との関係についても初めて学ぶことになる。この日の授業は、10時間計画の7時間目、「分母が10の分数と $1/10$ の位までの小数との関係について考える」が目標であった。

授業は、次のような課題で行われた。

ロールケーキを食べます。H先生は0.7こ、T先生は $13/10$ 個、校長先生は $6/10$ こ食べました。たくさんケーキを食べたじゅんにならべましょう。

この課題は、特にどうということのないものに見えるが、ここには三つの意図がそれとなくほどこされている。まず、大きさ比べをする三つの数字が一つの小数と二つの分数で出来ているのだが、分数より先に小数を出しているのはなぜだろうか。それは、前時まで分数の学習をしてきた子どもたちに分数ではない小数にまず出会わせたいというねらいがあったからだろう。

次に、これは本時の目標からして当然ことだが、二つの分数を「 $1/2$ 」とか「 $1/3$ 」とかではなく、分母を「10」にしたということである。3年生の子どもが小数との関係を考えるにはそうしなければいけなかったからである。

さらに、問いを「0.7を分数で表したらどうなりますか」などと直接的に尋ねるのではなく、「たくさんケーキを食べたじゅんにならべましょう」というようにしたのは、そのことによって分数と小数を比べようとする意識に自然に誘える、そう考えたからにちがいがなかった。

この課題は、教科書通りではない。ケーキを食べた3人の名前が校長先生以外イニシャルになっているが、授業では実名であり、それは、授業をしたH先生ともう一人の3年担任のT先生の名前であった。つまり、この課題文は、この授業に当たり考えられたものなのである。分数二つと小数一つの比較という構図は教科書の問題そのままなのかもしれないが、そうだとすると、子どもたちが身近に感じられるようにアレンジしている。初任の教師がそこまで考えて作成されたとしたらすばらしいことだが、これまで私が感じていたI校の先生方の取り組み状況からすると、こういったさりげない工夫は、T先生や研究主任のN先生の支えがあって行えたことではないだろうか。

### ② 授業デザインの確かさ

そういう先輩教師の支えということについて、もう一つ感じたことがある。それは、この課題に取り組むにあたり、「テープ図をかいて考えましょう」というような「考え方」を示さなかったことである。「分かりやすく、どの子どもできるようにしよう」と目論む教師は、そういう「考え方」をまず示して、そのやり方で考えさせる。やり方が示されれば、そのやり方通りにやればほとんどの子

どもができるだろう。しかし、学びとは、その時間の課題が解けることだけを目指すものではない。その時間の課題は、たくさんの課題の一つである。大切なのは、その課題に挑むことによって、算数・数学的な考え方が育ち、これから出会うであろういくつもの課題に挑めるようになることである。学びは目先のことだけでなく、もっと先のことまで目指すものでなければならない。

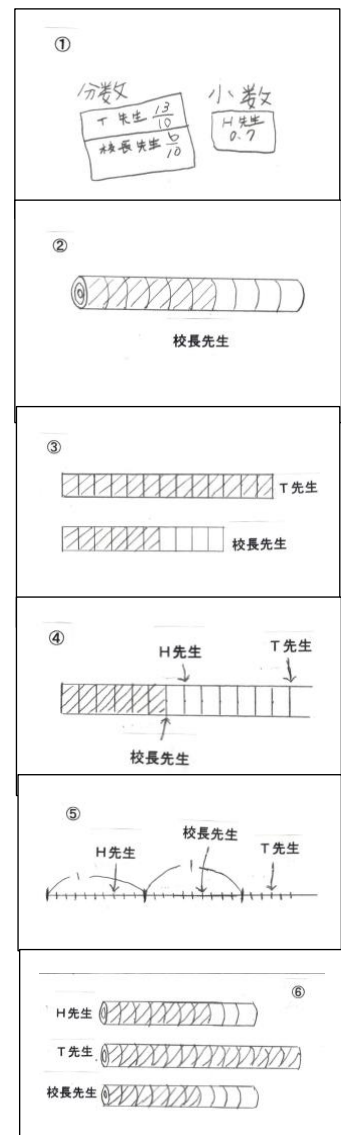
H先生は、「テープ図をかいて考える」というような一つのやり方に限定しなかった。それは、彼女がそうしようとしたのかもしれない。それとも、N先生やT先生から学んでそうしたのかもしれない。もし、二人の先生から学んだのだとしたら、そのお二人が素晴らしい。どちらにしても、「早くできる」ことを第一に考え、教えることを急ぐ従来の授業にとらわれず、時間がかかっても子どもに考えさせよう、自分なりの思考をさせよう、そう考えられたからできたことである。

このように考えると、この授業のデザインはかなりよいものになっていることが分かる。H先生が頑張ったのだ。けれど、その頑張りに隣の学級のT先生と研究主任のN先生の力強いフォローがあったことは間違いない。

子どもたちが、課題に取り組み始めたのは、授業が始まって8分近くたった頃だった。そして、取り組みをストップさせて、一人の子どもを指名して、「H先生だけ小数になっているから(どのように比べていいか)分からない」という「分からなさ」を発表させたのは24分過ぎだった。つまり、子どもたちはそれまでの16分間、先生の指導を受けることなく考え続けたのである。

そのとき、子どもたちが行っていた「考え方」は、私が見ただけで次の8通りあった。

- ① の子どもは、まず分数と小数を分けてノートに記した。そうして分数と小数をどう比べたらよいのか考え始めたのだろう。
- ② の子どもは、ロールケーキの絵を描いて、まず校長先生の  $\frac{6}{10}$  の大きさに区切ってみて、これからT先生のロールケーキも区切っていこうと考えていたのだろう。
- ③ の子どもは、ロールケーキの絵ではなく、テープ図にして考えている。見ていただいで分かるように、校長先生とT先生とは別のテープにして、端を揃えて大きさの比較ができるようにしている。
- ④ の子どもも同じくテープ図にしている。しかし、この子どもは、1本のテープ図に3人の先生の大きさを表している。もうすでに、校長先生の大きさもT先生の大きさも示されているし、それだけでなく、「0.7」という小数のH先生の大きさも特定されている。それが区切りの7つ目のところになっているということは、小数と分数の関係も考えてのことだと考えられる。
- ⑤ の子どもは、線分図のようにかき表している。しかも、1本の線の上、ロールケーキを1本2本とつなげるようにして描き、それぞれの大きさが分かるようにしている。
- ⑥ の子どもは、②の子どもとおなじようにロールケーキの絵を描いているのだが、H先生、T先生、校長先生それぞれのロールケーキを描いて端を揃えて大きさを比べている。



⑦ の子どもは、絵や図を使わず、文章表記で考えを述べている。ただし、小数のH先生がなぜいちばん小さいのかまでは書けていない。

⑧ の子どもは、⑦の子どものように文章表記なのだが、この子どもは、小数表記のH先生については、0.7が1より小さい数だということは分かっているが、分数との関係については書いていない。そのためだろうか、6/10の校長先生との比較はできていない。

⑦ T先生はと校長先生は分数だけど、H先生は0.7こだから3位で、校長先生は6/10で、T先生は13/10こ食べたから、校長先生は1つを10等分した中の6こ分だけ、T先生は10等分した中の13こ分だから、T先生が1位、校長先生が2位です。

⑧ H先生…0.7 こは1本の中の0.7だから1本より少ない。  
T先生…13/10 こは10こ分と3個だから、1本と3こ。  
校長先生6/10こだから、10等分した6こ分で、1切れ×6。

まとめ H先生…1本より少ない  
T先生…1こ分が13こ  
校長先生…1こ分が6こ

こうして見てみると、子どもたちがどのように考えたのかが見てとれる。まず気づくのは、予想通り、絵を描いて考える子ども、数直線をかく子ども、文章表記する子ども、テープ図にする子どもといろいろに分かれたということである。そして、同じ図や絵でも、3人の先生の食べた分を1本の絵や図で考える子どももいれば、3人それぞれ、つまり3つの絵や図で考える子どももいた。

次に分かったのは、ほとんどの子どもが小数の存在を意識して考えていたということである。だから、何人もの子どもが、①②③のように、小数を除いた二つの分数から考え始めている。もちろん最初から小数をどうするのかということ考えた子どももいる。⑦⑧の子どもがそうである。しかし、この二人も、小数を分数に直すことについては気づいていない。もちろん、そのことに気づいている子どももいる、それが④⑤⑥の子どもである。

子どもの考え方がいろいろ、理解の程度もいろいろ、それが、多くの子どもが学ぶときの本来の姿ではないだろうか。それだけ子どもの思考は柔軟で、個性的なのだ。指導された通り、一つのやり方を習熟させる授業ではこうはならない。

子どもたちが取り組んだ16分、教室は静けさに包まれた。もちろん子どもたちはペアで考え合った。教室中のどの子どもも。にもかかわらず静かなのは、どの子どもも、体を寄せ合い、顔を近づけて、ほんとは小さな声で考え合っていたからだ。教室中のだれもが、本気になって考え始めたら、子どもたちはこんなに繊細な感じになるのだ。

もちろん、こういう状態になったからと言って、これだけさまざまな考えが出てきたからといってそれだけでよいわけではない。このような考えが突き合わされ、自分がしていなかった考え方を知ったり、自分の考えと比べてどちらがより分かりやすいかと考えたりするようにしなければならない。そうすることで、子どもたちの考え方の幅が広がるとともに、考えの深まりを得ることにもなるからである。この授業は、そういう学びを目指してデザインされたものだったのだ。そういう授業を経験の少ない初任のH先生がやってのけたのだ。それを可能にしたのは、H先生の良さはもちろんあるけれど、「学び合う学び」に取り組んでいるI小学校の同僚性があったからだとは私は断言する。若い教師が育つ学校にはそういう文化が生まれるのだと思う。

### ③ 教師の“ゆっくリズム”が子どもの学びをつくる

H先生の良さがある、そう述べた。それは、一言で言えば、子どもに対する、学びに対する“ゆっくリズム”だと私は思った。分からなくても、急かされることなく、ゆっくりと考えることができる、子どもにとって、学びにとって、これほどよいことはない。

“ゆっくりしている”とは言っても、ぐずぐずして時間がかかるということではなかった。現に、前述した課題に入る前、つまり授業の冒頭で、H先生は「 $1/10$  と  $2/10$  とはどちらが大きい」という、その後の学びの布石とも言える問いを出していたのだが、そこにかけた時間はたったの2分半だった。さらに、課題のプリントを配り、めあてを提示するのにもさして時間はかからなかった。そこに、ゆったりしているのだけれど言葉数が少ないというH先生のよさが感じられた。

子どもが取り組んだ16分間もよかった。

H先生は、その16分間、ずっと机の間を巡っていたのだが、その際、むやみに子どもに声をかけなかった。これはできそうでできない。やり方を教えないで子どもに取り組ませているのであるから、分からなくて困っている子ども、間違った方向に進みかけている子どもなどがいて当然である。教師ならそういう子どものことが気になり教えたくなるものである。けれども、H先生は、そうしなかった。「こういう分からなさや間違いの行きつ戻りつから学びが生まれるのだ」「こういう時間こそ子どもに必要なのだ」と考えることで、子どもは「学びの主人公」になれる、初任の彼女にそこまでの考えはなくて当たり前だ。だから、そういう目で子どもや学びを見つめ、「待つ」「見守る」、そう心がけていたのではなかったのかもしれない。では、なぜそれができたのか、やっぱりそれは、彼女の“ゆっくリズム”なのではないかと思われた。

ただ、そんなH先生も、子どもが取り組む学びは子ども同士の学び合いにしなければならないということは分かっていたのだと思う。それが表れた場面があった。

一人の子どもが通りかかった先生に何か話しかけた。H先生は、しゃがむようにしてその子の言葉に耳を傾けた。その後だった。先生は、その子の隣の席のペアの相手に、何か一言二言話すと、声をかけてきた子どもに、「二人で考えてみてね」と言ったのだ。それは先生が説明してもよいことだったのかもしれない。けれど、H先生がしたことは「ペアの子とつなぐ」ということだった。きっと二人で考えることで打開できると考えたからに違いない。そういう判断ができる、それは、単なる“ゆっくリズム”ではない。

H先生の“ゆっくリズム”が最大に発揮されたのは、「H先生だけ小数になっているから(どのよりに比べていいか)分からない」という「分からなさ」が出てきたこの授業の後半においてである。この子どもの「分からなさ」は、この時間の目標が「分母が10の分数と $1/10$ の位までの小数との関係について考える」だったことからして、願ってもない疑問提起だった。そんな絶好の状態だったのだから、残り時間20分において、「H先生の食べたロールケーキ0.7という小数は、 $7/10$ という分数で表すことができる」という結論に至っただろうと思われるだろうが、それがそうはならなかったのだ。それはどうしてか、そこには、H先生の“ゆっくリズム”と、未知のことを学ぶときの

子どもの考え方・気づきの教師の想定を超える意外さが存在していたからだった。

3～4 ページに掲載した子どもがノートに書いていたことからすると、「0.7 が  $\frac{7}{10}$  と表すことができる」と考えていた子どもは何人もいたはずである。にもかかわらず、H先生は、そう結論づけることをしなかった。それは、子どもたちとのやりとりが次のようになったからである。

『0.7』は『1』より小さい

「うん。だから、H先生は、ちょっとしか食べていない」

『0.7』って、『位』がある。(だから分数とは異なるというような雰囲気を出す)

『0.1』は小数の『位』だけど、分数にできるんじゃない？」

ここで出てきた「位」とは、「小数第1位」というように言うことを指しているのだろう。そういう言い方を分数はしないから、小数と分数とはつながらない、そう感じたのだろう。それに対して、「そうだけれど分数にできるのではないか」と言う子どもがいたが、「位」を持ち出した子どもは首を傾げている。

そこで、H先生は、小数の「0.7」は一旦置いて、分数で表されているT先生と校長先生はどちらがたくさん食べたのかの結論を出すことにした。それだけに絞り、ここでペア学びも入れたことにより、『 $\frac{13}{10}$ 』は、ロールケーキ1本を10に分けた一つ分の『 $\frac{1}{10}$ 』が13個で、『 $\frac{6}{10}$ 』は『 $\frac{1}{10}$ 』が6個だから、T先生の方がたくさん食べた」ということは簡単に了解できた。

すると、それならということで、一人の子どもが、「0.7」は「 $\frac{7}{10}$ 」だということをリットルますの図を描いて説明してきたのだった。

『0.7』は1リットルますを10等分したうちの7だから、『 $\frac{7}{10}$ 』と同じ」と。

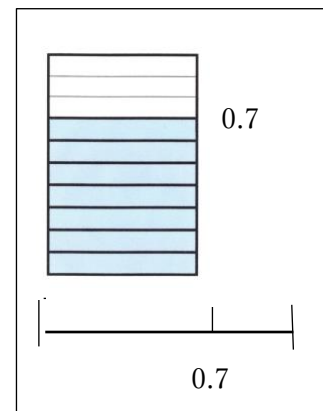
ところが、この説明で子どもたち全体が「そうか！」という納得に向かうのではなく、次のような質問が出たのである。

『0.7』が『 $\frac{7}{10}$ 』になるんだったら、校長先生の『 $\frac{6}{10}$ 』もT先生の『 $\frac{13}{10}$ 』も、小数に表せますか？」

これに対してすぐ、「できる！」という空気が生まれればよかったのだが、それがそうはならず、多くの子どもたちが黙っていた。つまり、たぶんそうだとは思っていたのだろうが、それが確信を持って説明ができないから黙っているしかなかったのだろう。

すると、そんなところに、また別の考えが出されて、子どもたちは混乱してしまう。それは、「0.7」を分数にすれば、右のように「 $\frac{0.7}{1}$ 」になるのではないかという考えである。黒板に書かれたその分数？を見た瞬間、子どもはなんと面白い発想をするものと驚いたが、よく考えると、それは小数を分数に直そうとした子どもがなんとか考え出したものだと気づき、私は舌を巻いた。この子は、1本のロールケーキを分けて0.7にしたのだから、分母は「1」になると考えたのだろう。しかし、先ほど1リットルますで説明した子どもが「10等分の7が『0.7』だから、10等分じゃなくて『1』に分けてあるっておかしい！」と言われてしまう。

そうこうしているうちに時間はたち、とうとう授業終了のチャイムが鳴ってしまった。



$$\frac{0.7}{1}$$

それにしても、子どもの考え方・気づきは私たちの想定を超えている。「位」のことを持ち出した子どもがいたけれど、それは実に意味深い気づきである。小数に「位」があるのは、小数も「十進数」だからである。それに対して分数には「位」がない。それは「十進数」ではないからである。つまり数の表し方が違う、そのことに子どもが気づいたのである。

「0.7/1」も、考え方としては間違いではない。それが証拠に、分母、分子を10倍すれば「7/10」になる。子どもの気づきにはどれも意味があるのである。

こうした子どもの気づきが生きる授業になったらどんなによいだろうかと思う。それには、子どもの考えを受け入れ、この場合であったら、何と何がどう異なるのかということをおお切にしながら、異なっているけれどどこかでつながっている、それはどこなのかと考えさせていくことが大切なのではないだろうか。そういう物事の考え方は、算数・数学だけに限らず、生きていく際に出会うさまざまな場面が必要になることだと思うからである。

多くの授業では、そんなことを考えもせず、「0.7は7/10と表すことができる」とあっさり教えてしまう。どちらが数学的だろうか。どちらが本質的だろうか。子どもの気づきは素晴らしい。知らないことに対して本気で考えるから、こういう発見が可能になるのだ。

以上のようなことにH先生が気づいていたのではないとは思ふ。けれども、事実としては、子どもの気づきが大切にされている。やり方を単なる技能として教える授業では、こういう気づき・発見は生まれにくい。子どもが取り組む学び方を実践し、教師が“ゆっくリズム”であれば、そうした気づき・発見が子どもたちの新たな思考、深い思考につながる。私たちは、初任のH先生の授業からこのことを学ばなければならないのではないだろうか。

冒頭、「若い人が育つ学校は、基本的によい学校である」と述べた。それは、先輩教師たちが若い教師をしっかり支えているからということもあるが、それだけではないのだ。経験豊富な多くの教師たちが、H先生のような若い教師の授業から学ぼうとしているからよい学校になるのだ。若い教師は、ベテラン教師がこれはこうだと疑うことのないことであっても、その大元のところから知ろうとする。そのとき、思いもかけないことが浮かびあがる。そして、ベテラン教師を驚かせる。学校は、若い教師が生き生きと実践できる所にしなければならない。

## 2 若い人の可能性が教師の仕事の魅力を表している

教育実習で初めて授業をした学生から、感動的な話を聞いた。

実習が始まって1週間目、彼女は、連日、指導教師の授業を参観していた。そのとき、授業で行われていることが理解できず、学習意欲を失いがちな何人かの子どもがいることに気づいた。

2週間目の実習に入って、その学生が授業をさせてもらうことになった。

そのとき、彼女は、あの学習意欲をなくしている子どもが意欲的に取り組める授業をしようと誓った。そして、それには、東海国語教育を学ぶ会の例会で目にしたような、子どもと子どもが学び合う学びにするしかないと考えた。

彼女は、指導教師の了解を得て、分からなければペアの友だちと一緒に考える、そういう「学び合う学び」に取り組んだ。すると、前の週に、分からなさから意欲を失いかけていた子どもが、その時間の問題を解くことができ、ほんとにうれしそうにしたというのである。

私は、このエピソードを語ってくれた学生の弾んだ声を、眩しい思いで聴いた。なぜ眩しかったのか、それは、若い人の可能性を感じたからである。まだ、教師にもなっていない人であっても、こんな事実が生まれる。そういう人が、これから教師となって羽ばたいていく。それがどんなに素晴らしいことか、そう感じたからである。

今、教師像が揺れている。それはいろいろなところに表れているが、もっとも懸念されるのは、教職を志望する若者の減少、欠員が 3000 人にも達するという全国的な教員不足ではないだろうか。そういう状況を生んでいるのは、とどのつまり、教師という職に対する魅力が薄れているからである。

そうってしまった原因は一様ではない。社会の変化にも影響されているだろうし、人々の職業観の移り変わりによっても言えるだろう。

しかし、この事態をそれだけで済ませることはできない。他の分野よりも教育が大切だというわけではない。どんな職であっても、それぞれの職は、人間社会にとって意味のあるものでなければならぬ。ただ、教職の有する意味は、私たち人間社会の将来を左右するものだということを噛みしめたいと思う。子どもの教育は未来の社会、未来の人間のあり方にかかわるものであり、それをないがしろにしたのでは、この国の行く末に暗雲が垂れ込めるからである。

そういう職である教職が敬遠される傾向をこのままにはできない。もちろんその打開に対しては、行政的対策が不可欠である。教育が大切にされる状況をつくることなしに、人々の心も社会もよりよくなるからである。来年度の国の予算に、教師を増やす枠が盛り込まれるかもしれないとも聞くが、そのように考えてもらえることはありがたい

その一方、今まさに教師という職業に就いている私たち（すでに退職した身であるが日々学校訪問をして授業づくり学校づくりにかかわっていることからあえて「私たち」と述べる）も、教職の意味、魅力を発信しなければならない。現職が発する言葉や生み出す実践のもつ重みを思うからである。教師の仕事は、このように大切なのだ、このように子どもの成長・発達につながっているのだ、そして、このような魅力があるのだというように。

本号で紹介した初任の H 先生の授業、そして、教育実習における一人の学生の出来事、こういう事実が生まれているということ、そのことを、たくさんの人々に知ってもらいたい。教師になったばかりの人、これから教師になろうとしている人が、こんなにも生き生きと取り組んでいる。それが、学校の教師の仕事なのだ。そう知ってもらいたい。

私が願うのは、H 先生や H 先生を支えた先生たちのような同僚性が生まれ、そこに加わりたいと思う若い人が増えていくことである。学校にはそれだけの魅力があるのだから。

2024 年(令和 6 年)の元日に発生した能登大地震。テレビのアナウンサーの絶叫が平穏な空気を突き破り、私たちは画面に釘付けになりました。一日たち二日たつと、能登半島の目を覆うような被害状況が明らかになり言葉を失いました。人的被害、物的被害の数々が目を追うごとに増加し、地震のすさまじさをこれでもかと感じさせられました。すると、今度は、その北陸に救援物資を届けるための海保機と JAL 機が衝突炎上するという信じられない事故が発生しました。

なんという年の始まりでしょう。生きるということはこれほどまでも苦難と悲しみを乗り越えなければならないものなのでしょうか。どう考えるべきか、言葉になりません。お正月三が日の出来事だっただけに、その思いが強く私たちに迫りました。